

## 江戸時代の別府の景観

——別府の村のなりたちと生活——

別府大学教授

後藤重巳

はじめに

最近、国際化とか福祉ということばが盛んに聞かれます。このようなことばは耳新しいようにありますが、実はそんなに新しいものではありません。

国際化につきましては、縄文式の土器が、朝鮮半島や一説によりますとアメリカ大陸まで伝わっているという話もあるし、歴史時代になりますと聖徳太子の中国との交渉をはじめ、平安時代からのち朝鮮半島や中国とずいぶん深い関係があります。戦国時代に大友氏は東南アジアと貿易を行なっているわけで、内容は多少違いますが決して耳新しい社会現象ではないということです。

福祉につきましても、すでに千二百年前の律令制度（りつりょうせいど）のなかでは七十才以上の老人は特別に保護を加えるとか、十五才未満の子どもには罪を犯しても処罰しないとかい

う決まりがあるくらいで、そうした意味での福祉政策や対策がありました。江戸時代には各地に社倉（しやうそう）という福祉施設があり、民間には友救（ともすけ）といわれる相互扶助の政策もありました。

国際とか福祉というものはこのように考えると新しい問題ではなということばです。とくに情報化ということばは現在世間に蔓延（まんえん）しています。情報というものは人間が複数になったときには情報の交換ということが必要になり社会には不可欠の条件であります。

奈良時代に中央の朝廷の命令で「風土記（ふうどき）」というものを作ります。これは地方の情報を中央が知りたいために作らせたものです。これは情報そのものであります。

中世には頼朝が発した法令のなかに偽の報告や情報を出したものを罰するということで、いかに正しい情報を

期待していたかということが知られています。南北朝時代に北畠親房という人が『神皇正統記』という本を書きました。これは南朝を正当化するために書いたもので、この本の主張を流布させることによって南朝の正当性を主張とした情報手段であったことに間違いはありません。

戦国時代には大名が分国（領地）外への音信を禁止しました。これは情報が洩れることを防止したのですが、逆に隠密や忍びの者をしきりに放って情報の収集を行なっています。これが富国強兵のもとになるわけです。

江戸時代になると幕府は將軍の代替わりの年に全国に巡見使を派遣して地方の情報を得ています。この時に村々で作られたものが「銘細帳」といわれる帳簿です。幕府は伊賀者や甲賀者という忍者（スパイ）を抱えています。これが相当精密な情報収集を行っています。

江戸幕府は鎖国を行ないます。鎖国をすれば世界の情報が入らなくなることは当然であります。幕府はオランダ人と中国人だけは長崎を通じて入ってくることを許しました。ところが、オランダに対して世界の国々の情報をもたらす事を条件にし、オランダはこの情報を記録に

して長崎奉行に渡しました。長崎奉行はこの情報を通訳に翻訳させて江戸に送りました。とくに重要な、情報は直接江戸に送り幕府の内でも翻訳して独占しました。この情報をまとめたのが『オランダ風説書』として残っております。幕府は鎖国しているながら、一方では世界の情報に目をむけ耳を傾けていたのです。

事実、嘉永五年のペリー来航の情報は一年前にオランダを通してその情報を掴んでいました。この頃にはそんな情報は地方に流れており、岡藩の小河一敏がペリーがやってきた年の暮に、浦賀の警備に出た熊本藩の藩士に「アメリカの使節が、早晩来航することは分かっています。お宅の藩はさぞかし大変であろう」という手紙を出しています。ペリー来航の情報がどこから漏れていたのです。当時、長崎に岡藩がご用達として指名していました。石本卯之助という商人がいました。この商人が月に二回づつ定期的に岡藩に便りを出しているわけですが、この中に「極秘」という秘密の情報が岡藩にもたらされてきました。そういう情報が小河一敏をして勤王運動にむかわせる原因になったかも知れません。

幕末には管理すべき重要な情報があちこちに流れるようになりました。江戸幕府が潰れる原因の一つに管理していた機密や情報が流れ出るようになったことがあげられ、これも知れませんが。

近代という自由社会と江戸時代以前の封建社会の違いは、情報を自由に流布できる時代が近代、為政者が情報を独占していた時代を封建社会といっても間違いはありません。「言わざる、見ざる、聞かざる」ということは長いものに巻かれるという封建思想を代言するものといわれます。言いたいことも言えない、聞きたいことも聞けない、見たいことも見られない、これが封建社会と考へてもよいでしょう。情報授受の拒否です。

このような情報とくに歴史的な過去の情報を集めて研究しようというのが歴史の研究であるわけです。つまり、豊富な資料・情報を如何に得るかということが歴史の研究方法であり、情報を駆使して過去を再現することが歴史研究ということになるわけです。この歴史の研究には考古学の遺物もあります。文字のない時代では遺跡や遺物の石器や土器がものを言っているわけです。

古文書史料や絵図面、今だに伝わっている風俗習慣・口碑伝承や伝説昔話などすべては過去の事実を伝える情報資料であります。われわれは考古の資料をはじめとする情報を使って歴史の研究をしていくわけです。

今日は、わたしは江戸時代の別府に関する資料を提供して、皆さんが江戸時代の別府の歴史という問題を考える一つの資料にできたらと考えます。

別府に関して忘れてはならない資料に、慶長五年、関ヶ原の戦いの前後に杵築から小倉に移った細川忠興（寛永年間に熊本に移り熊本の藩主になっていらしい明治を迎えるのです）の息子の忠利が、小倉藩時代に作った「人畜改帳」というものがあります。これは今流にいえば徹底した国勢調査というふうなもので、この中に速見郡別府地域の数か村の非常に詳しい数字が出ています。

この他に、別府市域では江戸時代に何度か各村ごとに「村銘細帳」が作られました。これは各村で作成して幕府に届けたものですが、いわば村政要覧あるいは市政要覧のようなもので、各村々の色々な様子がわかる資料で

す。これが四か村分が残っています。残念ながら現在の別府の中心地の村のものは残っていません。周辺の四か村のものがありまして、江戸時代の別府周辺の村の様子を細かくつかむことができます。

さらに、幕府が江戸時代に三回に分けて全国の郷村の調査を命じた『郷村帳』というものがあります。これは江戸時代初期の正保年間、元禄年間と天保年間の三回にわたって作られたもので、豊後国（大分県）のものは内閣文庫のなかに残っていて、江戸時代の初めの頃と中ごろと終わりごろの大分県内の石高を知る資料としてかけがえのないものになっています。この「郷村帳」に別府の記録も詳細に出ております。

その外に江戸時代の農村の米の生産高・田の面積、その耕作者や年貢の率だとかが細かく記されている「検地帳」がいちばん欲しいのですが、残念ながらこれを見ることができせん。ただ、幸いにして細川忠興の時に作った立石村の「検地帳」を踏襲したと思われる資料がありまして、これで立石村の様子を少し知ることができます。

このほかに郷土の人ではありませんが、福岡の学者であ

る貝原益軒が、豊前豊後を旅した時に書いた『豊国紀行』というものがあります。この益軒から百年ほど経た天明年間、岡山の古河古松軒という学者が九州の地を旅行した際の記録に『西遊雜記』という紀行文があります。この中に別府の詳しい見分記がありますが、とくに貝原益軒の『豊国紀行』では、明礬作りの非常に詳しい情景が描写されています。明礬作りの記録としてはこれを上廻るものはないようで、別府にとって貴重な資料となっております。

以上のような資料を通して別府の江戸時代を眺めてみようと思います。

いったい「村」というものが何なのかということを考えてみますと、これは群れ（ムレ）からくることだといふことは普通の解釈になっています。これを村居（むらい）といっています。江戸中期の農政家の大石久敬が『地方凡例録』という本を書いています。これは役人が村の行政を行なうための手引きのようなものですが、この中に「村柄善悪之事」という項目があります。

「其村へ入りて四壁繁茂し、家居圍などの締りよきはよろしき村なり、又村柄を見るには其村の高に人馬の数を見合せて知るべし。高百石に人数百人に当たる村は上村なり…」

村の周囲の木立がよく茂って、家の周り<sup>まわ</sup>りがきちんと整っている村は良い村であり、一人につき一石に相当する村は上村<sup>じやう</sup>であるとしています。江戸時代では一人一日に二合五勺の米を準備すれば、一年に約九斗一升二合六勺で約一石になります。こどもも大人も平均して一人一石の米を保有していれば、食べた残りを売って農具を買ったり衣料を買うことができるので経済が成り立つということです。一石は四斗俵にすると二俵半になります。戦時中農家が保有米というものを確保しましたが、一人で二俵半の確保でした。

「馬これに準ず、又職人・商人・医者・山伏・道心者など遊民<sup>ゆうみん</sup>多き村はよき村なり、村方<sup>はつか</sup>繁花<sup>はな</sup>にて渡世<sup>しやう</sup>仕易<sup>しやす</sup>きゆへ爰<sup>こゝ</sup>に集まり、且つ村方<sup>むら</sup>豊饒<sup>ぶにやう</sup>に付、他村へ奉公に出る者なく、他村より入込み、高に合せては人数多し、依て<sup>よつ</sup>人多きは豊饒の村と知るべし、…」

つまり村方が経済的に豊かであるから、非生産者の山伏・道心者（門付僧）や遊び人などが多く集ってくるのだとっています。

「又村へ入り四壁もなく、有どもまばらにて、家居垣根などの破れも厭<sup>いと</sup>わず、庭の構へ草深く見ゆるは困窮の村なり、又村へ入り何となくそうそうとして透く様に淋しき体なるは、至って困窮村なり、…」

これは困窮の村とすぐに分かります。

「又家居は見苦しくとも山林・萱野・秣<sup>まぐさ</sup>場<sup>ば</sup>・葭<sup>よし</sup>場<sup>ば</sup>などありて、四壁も樹木の多くみゆる村は内證のよきものなり、…」

見かけは悪い村でも、内證<sup>ないしやう</sup>（懐具合）はいい村があるといっています。

さらに大石久敬は、このような村と浜村・里村・山付<sup>やまづき</sup>村・山村とを比較しています。浜村とは浦・磯のある浦部<sup>うらべ</sup>と呼ばれる海岸の村です。里村とは平野の中にある村で、山付村とは背後に山を控えた麓にある村で、山の中にあるのが山村で、このように村にはいくつかの形があります。

「山方、浜方は高（石高）に拘らず至って人の多きものなり、是は村柄の目当てにはならず、浜方は田地少なく、只漁獵のみを渡世にいたし、人も大勢入る仕業なるゆへ、他へ出ることなく、又所により漁師大勢集るゆへ人数多し、漁業は風向きの変あれば一向漁業のならざる日多し、適たまよき漁獵ありても、大勢の人数、平日他借などを以て其日を送り、且つ平日漁師は物を貯ふことなく其日暮にするゆへ、大漁ありても身に付くこと少なし、…」

と海岸の村は節約しなければ貧しい村だといっています。

里村は久敬はいつていないが、江戸時代の記録を見ますと、里村はまず牛馬を飼いますと草刈り場が多くありませんので山まで行かなくてはなりません。山の草刈り場で刈り取る刈敷（緑肥）などを遠方から運ばなくてはなりません。薪も山に薪を取りに行かねばなりません。

一番いいのは山付村です。遠方から水を引かなければならない里村と違って、ここは傾斜地だから湧水があります。すぐ裏に行けば飼料にする草も薪も取れるので、

立地条件が有利なです。

このように外観的に考えたときに、別府の村がどういう村に属するかということですが。

一、様変わりする別府の自然

自然は生きています。一一〇〇年程前の貞観年間に鶴見山が爆発し、その時代の記録『三代実録』によると、別府の里はほとんど火山灰をかぶり川は熱湯が流れて魚が死んでしまったという記事がでています。これは史実として残っているのですが、別府は非常に大きな天災によって地表が変化したようです。

別府は千二百年前の『風土記』や『日本書紀』に登場しています。別府は速見という地名で登場してきます。その後別府の自然がどのように変わったかということをも具体的に示すような資料はありません。

ところが昭和三十九年にオリンピックに際し、別府でもホテルの改造が行なわれました。その中に南明荘も鉄筋に建て替えられました。その基礎工事の折に地下約八米のところから石蓋土坑墓といわれる初期的な古墳が見

つかりました。これは十基ばかりの群集墓で、だいたい千六百年ほど前のものと考えられますが、その時代にはこの場所が地表であったと考えられます。ここは八米も土をかぶっていることになりました。この付近は千年も前には数米下の高さにあったわけです。これなどは鶴見山の爆発の時に土砂を相当かぶっているわけです。だからおそらく千数百年前にはこの辺りで人々が生活していた地表には、土砂がたまって八米にもなったということですね。

江戸時代に何回かの水害があつて泥をかぶっています。基本的には鶴見山の爆発の影響が大きかった、と考へた方がよいと思います。別府球場入口前の流川通にあつた旧山の手交番の地下からおびただしい石塔群が発見されました。この辺りも数米の土をかぶっており、現在よりも数米下にあつたことが分かります。

このように考えてみると、別府の景観というのは江戸時代の水害を含めて、現状とは相当大きな変化をしているということが分るわけで、当然人々の生活も変わっていると考へざるをえません。そのように別府の村では色々

苦勞しながら人々の生活があつたということが考へられます。

いまから八百年程前の鎌倉時代の記録のなかに、「べつぶ」ということばがでてきます。当時、石垣荘には二百町の土地があつて、この内本荘が百四十町で別符が六十町あるというのです。たとえば荘を村と考えると石垣村が二百町歩あるとすれば、本村は百四十町で別符が六十町ということになります。このことにつきましては『大分県地方史』十一・二号の合併号に別府の荘園しょうえんについて渡辺澄夫教授が詳しく書いておられます。

石垣荘という宇佐神宮の荘園があつてその周辺に新しく開かれ枝村があり、それが別符べつぷであつた。その外に「加納かのう」があつた。加納というのは税を加え納めるということで、新開と同じ意味のものと考へてもよく、その加納がのちに鉄輪と変化したものと思われれます。

このように考へますと、一つの見解ですが、別府は千年くらいの内に相当大きな変化をしている。つまり鉄輪の辺りは新開地であつたという問題も考へられないことありません。

## 二、別府地域の政治領域と領主変遷

関ヶ原の戦いを境にして徳川の政権になりました。大友氏も改易されてその頃この領主は細川忠興でした。

細川氏は徳川氏よりもはるかに格の高い伝統のある武家の名門であります。忠興の父藤孝という人物もたいへんな人物で、室町幕府の足利義昭が將軍になるために織田信長の援助を受けますがこの信長と一緒に義昭を將軍にまつり上げたという人物です。

したがってその子供の忠興が信長に可愛がられ、信長の斡旋によって忠興は明智光秀の娘たまを嫁にむかえました。これが細川ガラシャです。のち光秀が信長を倒しますが、忠興は義父の光秀に味方することなく豊臣秀吉をたて信頼を得て、秀吉の股肱の臣となりました。忠興の長男が前田利家の娘を貰います。細川家と前田家が手を組んだら困るのは徳川氏で家康は忠興に前田家と縁を切るように命じるがきかず、長男を廃嫡して三男の忠利を家督にしました。

この忠利が父忠興と共に別府の地に関係するのが関ヶ原合戦前年の慶長四年です。忠興が徳川家康から豊後の

国東郡と速見郡の二郡を貰う時に、家康に「懐具合が淋しいらしいので、足しにはなるぬまいが豊後の二郡を台所入りとして与える」ということで二郡を貰ったということです。このことは豊後の大切な地域に細川氏を配置して世の動きに備えたと考えられます。関ヶ原の戦いが終わると忠興は小倉藩の藩主となりやがて肥後に移りますが、忠興が小倉藩主時代に、人と牛馬などの詳しい調査を行なって作ったのが先にあげた『人畜改帳』といわれるのもなのです。

別府地域の村高変遷表(資料①)によれば、別府地域の古い村が登場します。この中の数字は、村の正式な米の生産高で村高といえます。幕府は全国の村の調査をしますが、その頃しきりに開発が進んで田畑の面積が増えたり、川が荒れ、また田畑が荒れたり、新しく道が出来た所もあるので、元禄年間に帳簿の改訂を行ない、さらに百五十年ほど経って天保年間に帳簿の作成を行ないました。この時には元禄時代の郷帳を部分的に修正したようです。それから江戸幕府が潰れた明治の初年の一八七〇年に調査を行なった資料があります。これらの数字



は、江戸時代を通して別府地域の村の石高になるわけです。正保郷帳の数字の右の「日」は日損所で「水」は水損所を示すものです。別府地域の村では、日照りの害を受けやすかった所、川が氾濫して耕地が荒らされた所が分かります。

このような郷帳によって江戸時代の各時代にわたる各村々の田畑を合わせた生産高の様子を見ることが出来ます。正保の鉄輪村は元禄には南北鉄輪に別れています。三つの郷帳を順に見ると、時代を追うごとに生産高が徐々に増えていることが分かります。これはおそらく新田開発などで耕地が増えていると考えてもよさそうです。江戸時代という時代はものすごく新田開発の進む時代です。江戸の初期には全国で二百万町歩ほど増えています。千八百年代、十九世紀には四百万町歩の新田があります。明治の初めには、全国の新田は六百万町歩といわれています。別府辺りでも水害で減る耕地がある反面、少しづつでも耕地が増えていることが分かります。

### 三、細川氏の国勢調査―『小倉藩人畜改帳』―

別府地域の村は複数の領主の領地に分れ、内成は府内藩、南端は日出藩、立石は萩原氏とよばれる旗本の領地になっていました。鶴見は森藩の所領でその外は天領とあって幕府の直轄地でした。幕府の直轄領というのはいつも幕府が直轄しているとは限らず近辺の大名に預けて管理をさせることもありました。

元和八年（一六〇八）、当時の領主であった細川氏が領地村高・家数・人数・牛馬の調査を行なって作成したものが、先に述べました『小倉藩人畜改帳』であります。このなかに出てくるのは、別府・石垣・浜脇・小野小平村と立石・東畑・山野口という村だけです。

それぞれ各村ごとの村高と家数と人別や牛馬の数がごと細かく書かれていて、村ごとに状況や生活を知ることが出来ます。たとえば牛馬数では牛の数の方が多いようです。西日本の村を調べるとどの村も牛の数の方が多く、関東では馬の数のの方が牛の数を上回ります。これは使役の方法が異なるためです。牛は主に農耕を馬は運搬ということに関係があると思います。

爾来、細川氏は時世を見る目に勝れていると同時に領

内の支配にたいへん細かな注意を払ってきました。ところで『小倉藩人畜改帳』のような帳簿が全国で作られているのは、細川氏が後に移った肥後藩と信州の「上田藩人畜改帳」が代表ですが、各藩では色々な方法で人口・石高などを調査しました。幸いにわれわれは細川氏の人畜帳で別府の数字を知ることができます。

細川氏は慶長十六年（一六一七）にも人畜改めを行ないそれから十一年経って元和八年六月にまた改帳を作っています。その慶長十六年と元和八年の帳簿に石垣村の記録があります。この人畜改帳の情報が当時の家の問題を考えさせるに重要なヒントになります。

慶長の帳簿にある老間とは家の一軒のことで、それぞれ庄屋孫兵衛夫婦、下女二人、小者（下人・奉公人）の源六、名子（小作人）三九郎夫妻が暮らす四軒の建物がありません。ところが十七年たった元和の改帳には、庄屋家に男子源（十二歳）が加わっています。歳から類推すると慶長十七年に出生したものと考えられます。また名子三九郎夫妻に千代若という男子が出生したことが分かる。下人は源六の他に与二郎と作蔵の二人増えています。

これらは別府市域の村の様子を知るために非常に重要な情報で、家族構成や労働力の構成を知る上できわめて重要な資料になります。

「人畜帳」には別府市域の村には横灘に大庄屋・小庄屋、頭百姓・小百姓があり、職業は水夫・鍛冶などが見えるが、改帳の国東や宇佐には、鍛冶・大工・大鋸・松皮葺・瓦焼・炭焼・焼物師・紺屋・とぎ師・つづら屋・仏師・紙すき・塩焼というような職業がでています。それから町人・新町人・焼物売・塩売、日用取・加子、それから被差別用語で不適切ですが、革田、はかせ・座頭・鉢開・禅門・念仏申・高野聖・さくらすりなどの宗教者・ざるかたげという職業が登場します。さらに、こしぬけ・病人・めくら・年寄ということばがでています。こしぬけは農村部に多く農民が重労働の結果脊椎病を患ったものと思われれます。これらは、庶民の生活や身体の健康の様子まで知ることができます。このような『人畜改帳』のような情報によって我々は、郷土の歴史の詳しい様子を知ることができます。

#### 四、細川氏の立石村検地帳と村銘細帳

立石村は元和元年に検地したものを、江戸時代を通して踏襲してきて明治まで用いてきた検地帳があります。

この立石村検地帳のなかに面白い問題があります。立石村の耕地はいくつかの「筋」と「通り」に分けられています。これは水の流れが通りになっていて、道が筋になっていますのかと思われまます。たとえば温水筋・ハナツラ筋・井手ノ内通・セイリモト筋・山田筋・ウチカワリ筋の筋・上の田ツカモ筋・乙原ナカマ通・御堂の原筋・ドウゾノ田筋・本村通・谷筋・カワクボ井手筋・堀田筋・スギノ馬場筋・イタヂ通というように立石の耕地が筋と通りとはっきりと分けられ、それに所属する田や畑が検地帳に登録されています。そして、別府には見られない「石崩入永荒」という田畑の荒地があります。たとえば山田筋を見ると、川の氾濫で耕地を荒い流した「古来川欠」「古来山崩」「皆荒」「古来山崩入」「井手ノ山崩入」「子ノ皆荒」などという耕地が荒れて毛付、つまり植付けができない耕地ができています。

立石村を細川忠興が甥の萩原三位廣門に千石与えた耕

地がすぐに荒地になってしまって六百石ほどしか米が取れなくなってしまう。立石村は別府の方に面した耕地と朝見川に面した崖崩れが激しくて、耕地が傾斜していることから水害を受け易かったようです。立石には別府から由布院に通ずる大切な往還がとおっており、また石垣原の合戦では大友氏が本陣を据えた地であります。

資料②は、別府村と石垣村の例を挙げたわけですが、『人畜改帳』にはこのように細かな数字があげられています。別府村の御惣庄屋（細川領では大庄屋のこと、手永という組ごとに置いた）の堀助之丞の家族構成と使用人の構成が分かります。別府村の集計を見ると、男女合計四〇一人とその内わけが書かれています。十五才で分けたのは、公役が懸かる年令だからです。牛馬は九十七疋匹となっています。石垣村はさきにあげた孫兵衛が小庄屋です。江戸時代初期の情報を満載した『人畜改帳』はすでに活字化されて市販されていますので郷土研究の資料にはどうかと思います。

五、江戸時代へのインターネット 村銘細帳を覗く

『村銘細帳』は別府市域では三か村分だけ現存しています。この中には細かな村の様子を伝えています。たとえば稲の種類や橋の数などさまざまな数字が記載されているのが『村銘細帳』であります。これには野土・赤土・黒土など各村の地質まで書かれています。稲の種類では、「シラカワ」・「ゼンロク」・「借錢なし」・「ホック」・「ミロク早稲」などがあります。「借錢なし」とは実のりがよいので借錢しなくともよいという意味でしょう。なかには「四国早稲」や「伊勢アラセ」というものがあり、これは琴平宮や伊勢詣での時にもち帰ったのでしょうか。「竈門ばうず」などというものがあります。畑作物でも稗・大根、生姜は別府名産でしたから各村で作られています。

それから、椿・東畑・小坂村辺りでは土橋がどの川に架かっていて幅がいくらなどと書かれています。各村々からの道程も出ています。立石村のものには三つの湯場とその効用まで出ています。

これらの他に色々の埋もれた資料や情報があります。

また、温泉と信仰とに関わる資料があります。明治三十五年四月、対馬の上島の豊村というところに洲河藤十郎という人の娘のミトという人がいました。このミトさんが婦人病で人ずてに、別府の浜田の御越の湯が効くことを聞き入湯に來ました。

その効果があり対馬に帰って、薬師の石像に幟を付けて浜田温泉に寄贈しました。浜田温泉ではたいへん喜んで、当時の藤井正吉・森貞三郎・藤内藤太郎が連署して洲河家に礼状を書きました。洲河家では丁重な礼状が来たので、感激して浜田温泉あてに礼状を書いた下書きが残っているのです。このように温泉が信仰にささえられているというような情報がまだあちこちにあると思われまます。今までに知ることのできなかつた貴重な情報を発見し、発掘していくのが地方史研究者としての別府史談会の方々役目であり、またそのような成果をまとめて公表するのが『別府史談』ではないかと思えます。

(文責 入江)

資 料① 別府市域の村高<sup>へんせん</sup>変遷表

村 名	正保郷帳 (1647)	元禄郷帳 (1701)	天保郷帳 (1834)	明治初代 (1870年代)
小 坂	508石243日	524石165	529石791	533石123
内 竈	589, 310日	590, 997	591, 529	610, 350
古 市	159, 133水	160, 133	207, 105	208, 551
亀 川	172, 808水	132, 920	132, 920	132, 920
野 田	394, 416日	405, 489	431, 489	432, 867
鉄 輪	385, 121	—	—	—
南鉄輪	—	354, 682	354, 682	355, 516
北鉄輪	—	239, 122日	239, 122	239, 122
鶴 見	622, 550日	828, 369	124, 573	—
北 中	446, 260	鶴見枝郷 591, 763	原中 875, 133 北中 820, 072	鶴見原中 970, 926 鶴見北中 633, 984
平 田	274, 983日	328, 202	331, 625	森藩 資料三郡記 333, 633
北石垣	828, 762	831, 214	832, 430	835, 908
石 垣	258, 218	中石垣 285, 218	285, 218	285, 218
石 垣	401, 990	南石垣 655, 273	655, 273	655, 273
別 府	709, 826	筑紫右折 944, 706	946, 941	946, 941
浜 脇	804, 474	669, 405	669, 642	669, 642
浅 見	—	304, 41	朝見 307, 136	307, 136
田野口	—	441, 654	442, 530	442, 530
東 畑	274, 597	229, 296	229, 620	229, 630
榎 村	—	136, 076	140, 234	140, 237
捏 山	18, 110	34, 750	34, 750	34, 750
山野口	177, 233	23, 572	223, 572	223, 572
天 間	93, 894	132, 580	141, 726	141, 726
南 畑	938, 701	942, 003	942, 003	1322, 000 日出藩
立 石	1000, 000 萩原三位 有高560, 052	1000, 000	1000, 000	1000, 000
内 城	492, 473	526, 032	595, 047	595, 047 府内藩

資 料② 元和の人畜改帳

	石 高	家数	人数	牛馬
別 府	649石24432	109軒	401人	97匹
石 垣	771, 6341	100	293	88
浜 脇	801, 5231	110	296	61
小野小平	91, 5167	10	33	9
立 石	560, 000	57	147	47
東 畑	332, 6193	75	237	61
山野口	215, 8625	25	106	9
捏 山	21, 8997	1	15	2
天 間	126, 8645	12	77	19